

図書館だより

～ 今月のおすすめ本 ～

大人の体力測定

田中喜代次、藪下典子

体力年齢、気になりませんか？タオルや椅子などを使って、自宅で一人でも体力測定ができます。仕事や趣味のために、元気で長生きするために、まず自分の体力を知ることから始めてみませんか。(東)



へるん先生の汽車旅行

芦原伸

「へるん先生」とは、ラフカディオ・ハーンの人々の呼び名です。本書は、新聞記者として働いたハーンの来日までの日々と、日本での横浜から姫路、松江、熊本、神戸、そして東京と旅を続けた足跡を鉄道旅の視点で追った紀行文です。(西)



▶詳しくは、東図書館 (☎ 62・0190) 西図書館 (☎ 75・5406) へ。

くらしの豆知識

～「食品ロス」の削減に向けて～

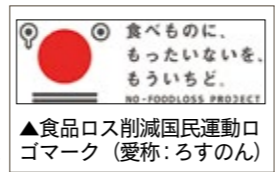
家庭の冷蔵庫の奥で、いつの間にか古くなってしまった食品や賞味期限切れの食品、また、料理を作りすぎて捨ててしまった経験などはありませんか。農林水産省などの調べによると、日本では、年間1,700万トンの食品廃棄物が発生し、そのうち食べられるのに捨てられる「食品ロス」は500～800万トンと推定されています。この量は、日本の米生産量にも匹敵する量となっています。

◆「食品ロス」を減らすために、私たち消費者にできること…

例えば、牛乳や卵を買うとき、奥の方から日付の新しいものを引っ張り出して買うことはありませんか。その結果、賞味期限の近いものが売れ残り、捨てられてしまうのです。家庭ですぐに消費する予定なら、手前に並んでいる商品から買うという消費者の意識改革も必要です。

また、冷蔵庫の中の食品管理や「食品ロス」が出ないように調理方法、献立の工夫に取り組むことなどが大切です。

《市民相談課》



▲食品ロス削減国民運動ロゴマーク (愛称: ろすのん)

ドクターTのひとりごと その26「消滅可能性都市」

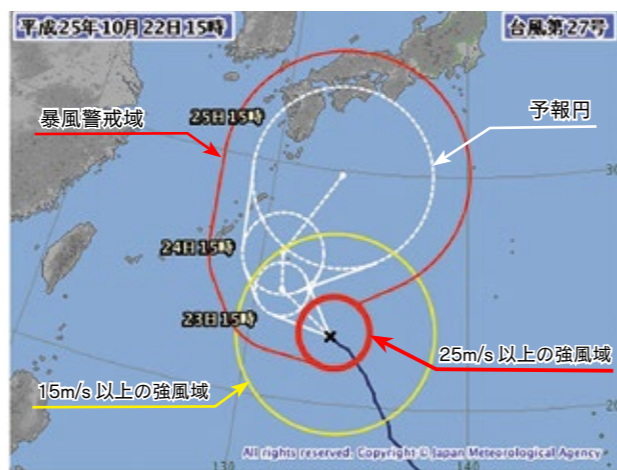
過日、日本創生会議から「全国の自治体の半数が2040年に消滅する可能性がある」との発表があった。その報告では、若者の地方から大都市への流出が今後も続き、特に若年女性が激減することにより地方自治体は存続しえなくなる一方で、東京圏は、高齢者が急増し将来的に医療や介護に対応できなくなる可能性が示された。地方自治体は、将来生き残ることができるのか、そのために何をすべきなのかが問われている。

私は、自分達が住むまち(舞鶴)の歴史や文化、産業、豊かな自然の特徴(強み)を勉強することで、誇れる地域資源を再認識し、子どもからお年寄りまでが一体となって主体的に取り組むと共に、女性の活躍の場を創出することにより、地域活性化を図ることが重要であると考えている。

また、小・中・高等学校および高等教育機関の教員の皆さんが、地元の商工会議所、農協、漁協ならびに地域金融機関と強く連携して、地域での人財の育成と地元定着率の向上に努力する中で、地元産業の振興を推進し、地域内産業の売り上げを増大させ、個人所得が増加するまちづくりが必要だと考えている。特に、未来を担う小学生や中学生が、地元へ愛着心を持つ環境を整備する必要がある。

防災ひとくちメモ

台風進路予報



上の図は、台風の中心が70%の確率で予報円の中を通過することを予想しています。暴風警戒域は、台風が予報円の中を進んだときに暴風域に入る恐れのある範囲を表します。予報円の中に台風が必ず進むわけではありません。台風が発生したときは最新の台風情報、気象情報に気をつけてください。(気象庁ホームページより)

▶詳しくは、危機管理・防災課 (☎ 66・1089) へ。

「引き揚げ」の記憶を次世代へ

引揚記念館に展示・保管している海外からの引き揚げやシベリア抑留などに関する約1万2千点の資料の中から、今回は「引揚者の腕章」を紹介します。

満州などで生活していた一般の人々の引き揚げは、それぞれ個人で移動するのではなく、隣組などの小さなグループをいくつも組み合わせた500～1,500人規模の“大隊”を結成して、日本へ向かう引揚船の出る港を目指して移動しました。

移動の前には、現地の政府などから腕章が配布されました。腕章には配布された年月日や番号、氏名が記載されており、それと同じ内容の名簿も作られました。引き揚げの途中に亡くなったり、家族からはぐれた子どもがいたりした場合に、腕章と名簿を照合して身元確認などにも役立ったようです。

当館に展示されている腕章にも配布された年月日や番号、氏名が記載されています。写真の腕章に記載されている「中華民国三十五年」とは、当時の中国の元号で、和暦の昭和21年(1946年)にあたります。

この腕章の寄贈者は、当時13歳。母と妹、親戚の合わせて6人で満州の撫順から引揚船の出る

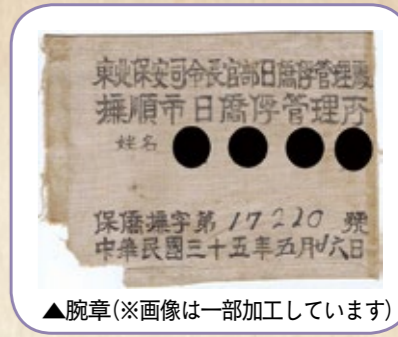
ころとう 葫蘆島へ向かう

1か月ほど前に隣組の組長から腕章が配布され、母親が衣服に縫い付けてくれたそうです。葫蘆島までは天井の無い貨車に乗せられ、3～4日かけてやっとの思いで引揚船に乗ることができました。

昭和21年(1946年)7月下旬に舞鶴港へ到着。初めて見る舞鶴の山々の緑は、子ども心にも美しく感じられ、それまでの苦勞と無事に日本へ帰れた安堵の思いから、涙が止まらなかったと言います。

戦後、海外に取り残され混乱する一般の人々にとって、腕章は、自分の存在を証明してくれるものであると同時に、引揚船へと続く希望の切符でもあったのではないのでしょうか。年月を経て、腕章は色あせていますが、そこに刻まれた記憶は色あせることなく、引き揚げの辛苦の歴史と祖国へ帰ることができた喜びを今も我々に伝えてくれているのです。

▶詳しくは、引揚記念館 (☎ 68・0836) へ。



▲腕章(※画像は一部加工しています)

広げよう人権の輪 ～伝えてゆこう“平和の尊さ”を～

6月12日、舞鶴引揚記念館収蔵資料が「ユネスコ世界記憶遺産」の国内候補に選定されました。世界記憶遺産は、現在を生きる世界中の人びとが過去から引き継ぎ、未来へと伝えていかなければならないかけがえのない宝物の中で、危機に瀕した書物や文書、あるいは映像フィルムなどの歴史的記録遺産を保全することを目的とした事業です。

第二次世界大戦の終結後、舞鶴は引揚港の1つに指定され、昭和25年以降は、国内唯一の引揚港として昭和33年9月7日の最終船まで、13年間にわたり66万4,531人の引揚者と16,269柱の遺骨を受け入れました。引揚記念館は、「平和の尊さ、平和の祈り」のメッセージを発信しつづける拠点として昭和63年に開館しました。シベリア抑留や引き揚げに関する衣類、生活用品、手紙など当時の貴重な資料や体験者の記憶で描かれた絵画を数多く所蔵し、遠ざかりつつある戦争や引き揚げの史実を語り継いでいます。

引揚記念館の数々の展示品は、冬はマイナス30℃を下回る極寒の地で、不衛生な収容所や乏しい食糧

事情、ノルマを課せられた過酷な労働により、次々と仲間が死んでいったことなど、抑留された人々にとっては、毎日が生きることとの戦いであったことを伝えていきます。また、舞鶴市民が、戦後の混乱期の自分の生活もままならない中、引揚者を精一杯の思いやりの心で迎えたことも知るすることができます。

戦争は、人々にとって死と苦痛を与え、人間の尊厳を踏みこむ行為です。戦後70年近く経ち、戦争を知らない世代が8割を超え、戦争や引き揚げの歴史も徐々に風化しています。私たちは、再び、このような悲しみの歴史をくり返さないように、次代を担う子どもたちに「平和の尊さ」をしっかり伝えていかなければなりません。

《人権啓発推進室》

